

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月1日現在

機関番号：32702

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520834

研究課題名（和文） 沖縄と南中国における個人的ネットワークを通じた人の移動

研究課題名（英文） “Migration Through Personal Networks in Okinawa and Southern China”

研究代表者

小熊 誠 (OGUMA MAKOTO)

神奈川大学・外国語学部・教授

研究者番号：90185562

研究成果の概要（和文）：近年、日系企業の中国進出に伴って、中国に在住する日本人の数が増加している。中国在住の日本人は、企業活動の他に県人会を組織して、さまざまな活動やネットワークの形成を図っている。その中で、沖縄県人会は、若者を中心とした個人的ネットワークによって活動が展開され、他県人会の組織が年功序列的であり、形式的であることと比べて異なる特徴が見られる。この違いは、沖縄人が自分の意志で就職先を中国に求めることや元来友人などヨコの関係を重視する性格をもつことなどによると考えられる。

研究成果の概要（英文）：There has been an increasing number of Japanese living in China as a result of more and more Japanese companies doing business in China. In addition to business activities, these Japanese people have organized associations of people from the same prefecture, engaged in various activities, and built their networks. The associations of Okinawans in China have also expanded their activities, mostly dominated by the younger members, through personal networking. This is unique, compared to similar associations of people from other prefectures, which tend to be seniority-based and more formal. It is reckoned that this dissimilarity derives from the fact that Okinawans often choose to work in China of their own free will and they traditionally tend to value peer relationships.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：沖縄県人会・ネットワーク

1. 研究開始当初の背景

沖縄から南中国への就職などによる人の移動は、日系企業の中国進出に伴って、ごく近年に始まったものである。しかし、地理的には、沖縄から上海、福州、

アモイ、香港までは日本の中で一番近い距離にあり、また、歴史的には前近代において琉球と中国の福建とは冊封・朝貢関係によって500年もの交流の歴史があり、琉球・中国関係は緊密な歴史関

係を維持していた。この地理的、歴史的背景は、沖縄県人にとって日本本土人とは違った中国に対する親近感を保有する要因になっていると考えられる。そのような背景を基盤として、沖縄から南中国の上海、福州、香港などで就職する人々は、直接的かつ個人的なネットワークを利用して沖縄から中国へ移動する傾向がみられる。この点は、企業の海外派遣を通して中国に在住する日本本土出身者とは中国移住の契機が異なると同時に、中国での県人会の活動や個人的ネットワークの形成の性格も異なっていると思われる。

2. 研究の目的

上記の背景をもとに、上海、福州、香港の南中国における沖縄県人会および沖縄県人のネットワークについて把握し、日本本土から上記各都市に移動している人々による県人会活動とネットワークと比較することによって、沖縄県人の人間関係の持ち方やネットワークの特徴について検討することを本研究の目的とする。

3. 研究の方法

上海、福州、香港において、まず沖縄県人会のインタビュー調査を進める。ここでは、沖縄県人会の活動だけではなく、どのようなネットワークで沖縄県人が集まっているのかをおさえ、さらに沖縄から各都市に移動した理由について個人的な情報を収集する。

沖縄県人と比較する意味で、上海における他県人会の調査を行う。

これらの調査資料を比較することによって、本研究の目的に従った検討を行なう。

4. 研究成果

(1) 上海沖縄賢人会

上海で働いたり、留学したりする沖縄県人が増えたのは、2000年前後のことである。その頃、沖縄県人が個人的に集まって飲み会をしていたらしい。沖縄県は、戦前から海外移住の多い県で、世界中で活躍する沖縄県人が集まって交流を行う世界ウチナンチュー大会が開かれるようになった。会場は、世界各地の沖縄県人が持ち回りで開催し、2005年は上海でこの大会が開かれるようになった。それをきっかけに、上海に沖縄の県人会が組織された。それを沖縄賢人会と命名したのは、沖縄出身で中国在住 20 年を越える S さんだった。

初代会長は MT さんで、日系企業派遣だったので、2009 年に帰国した。その後は、日系企業に現地採用で就職した MR さんが会長を務めている。MR さんは、福岡の大学に進学して、在学中の 1987 年に四川大学に留学

した。当時欧米志向が強かった中で、これからは中国の時代だと思い、日本人の少なかった四川に留学した。学費が日本より安かったので、日本の大学は中退して、四川大学に正規に入学することにした。7 年間留学して 1994 年に四川大学を卒業したが、その当時中国には日系企業が少なく、日本に帰国して就職することにした。中国航路をもつ沖縄の海運会社に就職した。そのころから、沖縄・福建サミットが始まり、その通訳などもした。1990 年代は、沖縄と福建の交流関係が盛んに行なわれ始めた時期である。1999 年から、沖縄県人材育成財団が国の補助を受けて同時通訳養成講座を開催し、MR さんもそれに参加して中国に派遣された。研修を終えて、中国で就職活動をした。沖縄から中国に行き、自分をステップ・アップしたかった。初めは大連の日系企業に就職した。2007 年からは、上海に移ってやはり日系企業に勤めている。

MR さんは、かなり早い時代から中国就職を考えて、四川大学に留学していた。そして、その計画通り 2000 年以降に中国で就職している。中国での生活経験は長い、留学時代から沖縄が恋しいと思いつけて来た。四川は海がないので、その時は沖縄の海が恋しかった。両親は沖縄で沖縄古典音楽を教えていたが、中学生のころはそれがうるさいと思って反発していた。しかし、今ではそういう沖縄音楽が懐かしい。「沖縄が好きなんですよ」と語る MR さんは、2007 年に上海に移って、すぐに沖縄賢人会に参加した。

沖縄賢人会の若手で中心的な役割を果たしているのは、NA さんという女性だった。彼女は、琉球大学で中国文学を専攻し、在学中に福建師範大学への派遣留学生の第 1 号として福州に滞在した。卒業後、2003 年に上海の復旦大学に大学院生として入学した。NA さんが中国に興味を持ったのは、浦添出身だった高校時代、同じく浦添出身で長年香港でビジネスを展開していた F さんの招きで香港にホームステイに行ったのがきっかけであった。香港沖縄県人会名誉会長の F さんの紹介で、上海の沖縄県人の集まりに参加した。その時は、まだ正式に沖縄賢人会は組織されていなかった。F さんは、香港在住だったが、ビジネス関係で中国各地の沖縄県人のネットワークをもっていた。

NA さんは、琉球大学在学中に琉球国祭り太鼓のグループに参加してエイサーの踊りなどをやっていた。福建師範大学留学時には、イベントとして留学仲間や福建師範大学日本語学科の学生たちに教えてエイサーを踊っていた。上海に来て、若い仲間とエイサーをはじめた。2009 年には、エイサーの仲間が 7・8 人いた。また、復旦大学の沖縄出身留学生が、三線を担当した。こうして、上海のエイサー隊ができたが、参加者は沖縄県人の

他に福岡、埼玉、滋賀の出身者がいる。さらに、台湾の東海大学出身者で、沖縄国際大学に留学中にエイサーサークルに入ってエイサーを覚えた女性も参加していた。国際的な、エイサー隊である。この人たちは、みな沖縄のエイサーに興味を持って参加している。

IMさんは、沖縄の高校を卒業してすぐに北京の中央民族大学に語学留学した。沖縄の留学斡旋機関で探して、そこに決めた。日本人の留学生が多くなく、大学の規模も大きくないことがそこに決めた理由である。実際に留学してみて、民族色豊かで面白かった。その後、中国語だけでなく貿易関係の勉強もしたいと思い、中国の大学への進学を考えた。北京で探したが、気に入る大学がなく、沖縄県人の人脈を考えて上海の大学を探し、2005年から上海財経大学への進学を決めた。知り合いの紹介で、すぐに沖縄賢人会に入った。賢人会に行くと、そのメンバーとは沖縄の方言で、地元の話話を話すことができ、「話が通じる」という安心感があつた。そして、沖縄県人との交流が楽しくなった。また、その場で、就職の紹介などもしてくれる。紹介があると、会社の責任者とすぐに面会ができるので就職や仕事などにたいへん助かる。上海で仕事をしたり生活するには、人脈は重要だ。そういうとき、いざというときに沖縄賢人会のつながりは大切だという。

IMさんは、エイサー隊にも参加しているし、その他バスケットボールのチームにも参加している。エイサー隊は、上海の日系デパートなどが開くイベントや上海沖縄県事務所が参加する県産品の発表会などに呼ばれて演舞をおこなう。そのため、毎週土曜日に宜川路の地元中学校の教室を借りて練習している。NAさんが経験者なので振付をして、自分たちで改良しながら演舞を作り上げている。2009年段階では7曲のレパートリーがあつた。衣装は、上海の布市場に行って布を購入し、自分たちで衣装を縫っている。バスケットは、毎週日曜日に日本人学校を借りて練習をしている。上海に来た当初、自分のミクシィを見た沖縄出身の友人が、バスケチームを紹介してくれた。バスケチームは、日本各地の出身者が集まってくる。

上海での生活は、日本にいたときより自分の時間が増えたと語るIMさんの活動を見ると、沖縄賢人会の人的ネットワークを中心に、就職やエイサー、さらにバスケチームと自分の活動を広げているのが分かる。

さて、上海で組織されている沖縄賢人会は、100名ほどが参加しており、年4回ほどの懇親会をするほか、沖縄の芸能であるエイサーや三線のグループが中心となり、上海における各種イベントに参加している。このグループの参加者は、沖縄文化に興味をもつ他県出身者が複数参加している。その他県出身者も

沖縄賢人会のメンバーであり、会の活動に参加している。会の活動は、主に飲み会であり、お互いの親睦が主な目的だが、沖縄県人に固執することなくオープンな人的ネットワークを形成している。沖縄県人だからというだけの形式的な関係でつながるのではなく、沖縄が好きだとか、エイサーを踊りたい等の自分の意思によって形成されるネットワークなので、その関係が緊密であることも大きな特徴として考えられる。さらに、この会の活動の中心は、若い人が中心である。その理由として、上海在住の沖縄県人は、中国留学の後に中国で求人活動をして、自らの意志によって中国で働いている若い人が多い。むしろ、初めから海外就職を目指して中国留学をしている。中国留学のきっかけも、親せきや友人あるいは祖先が中国と関連あるという人が多い。そこに、沖縄と中国の関係の歴史的、地理的緊密さが見られる。

それに対して、日本本土出身者は、企業派遣在住者が多い。例えば、上海宮崎県人会は、上海宮崎県事務所が幹事役を務め、年に数回親睦会やゴルフコンペを行っているが、その組織化は形式的であり、かつ年功序列的である。他の日本本土の県人会も、同じような組織化と活動が行われている。この点において、年功序列にならず、友人関係などヨコの関係によるネットワークで集まる沖縄賢人会と他県人会は性格が異なり、それは沖縄県人自身のネットワーク形成の在り方が異なるためであろうと考えられる。

(2) 福州沖縄県事務所

沖縄県と福建省あるいは福州市との関係は、特別な意味を持っている。前述したように、那覇から福州まで750キロメートルほどしか離れていないという地理的関係と琉球と中国の500年にわたる冊封朝貢関係を維持していたという歴史的関係の二つの緊密的な要素をもつため、日本本土の他県と比べると沖縄県は中国とくに福建省や福州市に対しては特別な感情を抱いている。

1980年の中国改革・開放以後、すぐに沖縄の民間の人たちが福建に来るようになった。初めは、久米村門中の人たちだった。久米村門中とは、中国からの渡来人を始祖に持ち、琉球王国時代に久米村系士族の身分をもっていた人たちの子孫の一族である。琉球王国時代に、琉球の領事館としての性格をもつ琉球館が福州にあり、そこに派遣された琉球人の祖先の墓が福州には多くあつた。それを探しに来る門中の人があつた。それから、福建から琉球に渡来した始祖の出身地を確認したいという門中の人たちがあつた。そういう人たちが、福建省の外事辦や観光局を動かした。そして、久米村系門中の祖先探しだけでなく、古武道の交流や民間の交流が始まった。この

民間交流をきっかけに、1994年から沖縄ー福建サミットなど沖縄県と福建省の友好交流が始まり、1997年に沖縄・福建友好県省の締結が行われた。それを記念して、1998年に福州に沖縄・福建友好会館が建設された。その中に福州沖縄県事務所が開設され、友好会館の維持管理と沖縄から進出する企業の支援を目的とした。

しかし、ちょうどそのころ経済バブルがはじけて、石材輸入会社と海運会社くらいの進出しかなかった。21世紀に入って、経済の発展と日本企業の進出状況から、上海と香港が経済交流の中心となり、福州沖縄県事務所の業務はほとんど友好会館の維持管理に集中することとなった。

(3)香港沖縄県人会

香港での沖縄県人ネットワークの中心人物は、前述したFさんである。Fさんは、本土の大学を卒業してから製薬会社に入り、香港に派遣された。しばらくして、香港で自立し、現在に至っている。Fさんは、沖縄出身者の人材育成に力を入れて来た。浦添市出身なので、浦添の青少年を香港に招いてホームステイさせている。沖縄の若者に、海外で挑戦するという意識を持ってほしいと願っている。また、沖縄から香港に来ている若者を集めて、「耕水塾」を開いて、飲み会をしながら香港での会社経営等について情報交換をして来た。

Fさんを中心に香港沖縄県人会を開いていた。ビーチパーティや忘年会など親睦中心の県人会である。Fさんの周りに沖縄出身の若い人たちが集まるようになり、その人たちも香港で自立してその企業が軌道に乗っている若い人も現れ始めた。Fさんは高齢のために仕事はリタイアしており、Fさんは名誉会長として、県人会の役員は若い人たちに受け継がれている。4年前に香港うりずん会と名称変更して活動を続けている。

活動は、香港で開かれる沖縄関係のイベントの協力なども積極的に行なっている。ウチナンチュのアイデンティティを大切にしたい、沖縄コミュニティをつくらうというのがコンセプトとしてある。しかし、参加者の中には、他県出身者も含まれている。沖縄が好きであればそれでいいという気持ちで、他県人もオープンに受け入れている。

上海や香港における県人会組織は、県事務所が幹事となって運営する形式が多い。在外生活者の多くが、企業派遣である場合が多く、数年で帰国するケースも多い。家族同伴で在外生活する人も多いが、県人会には主に世帯主である男性が参加する。県人会の活動は、懇親会やゴルフコンペであることが多い。そこでは、参加者同士が仕事関係の情報交換を

する場となっている。県人会の組織は、形式的であり、年功序列がその中に反映されている場合が多い。日本的な組織と言えよう。

それに対して、上述したように沖縄県人会組織は、沖縄県事務所とは一線を画し、独立して運営されている。それは、沖縄が好きだという個人的な意思のもとに集まり、個人的な親密なネットワークによるためと考えられる。また、沖縄県の人には、イチャリバチャオーダーの精神、つまり誰とでも友人関係を構築できるという性格が県人会組織にも反映されていて、オープンな組織となっている。

このような沖縄県人会の特徴について、中国本土だけでなく、台湾やハワイあるいは南米での沖縄県人会の調査を拡大して、内容を深めることが今後の課題として考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

小熊 誠 (OGUMA MAKOTO)

神奈川大学・外国語学部・教授

研究者番号：90185562